

# いね科飼料作物

## いね科飼料作物病害虫防除対策推進事項

- (1) 耕種的防除法に重点をおいた防除対策を推進する。やむを得ず農薬を使用する場合においても牧草の生育初期に限るなど、畜産物への残留防止を考慮し、必要最小限にとどめる。
- (2) アワヨトウはいね科牧草に時として集中的大発生する重要害虫で、老齢幼虫になると食害量が増大し、薬剤感受性も低下するので、早期発見を心がけ集中産卵地を確認次第速やかに防除を行う。

## ごま葉枯病 *Cochliobolus heterostrophus*

- I 防除の狙い 飼料用とうもろこし、テオシントに発生し、一般にすす紋病よりも早く発生しはじめ、また被害も多い。防除は耕種的防除に重点をおく。
- II 防除法
  1. 発病の多い畑では連作を避ける。
  2. 被害葉を集めて焼却する。
  3. 肥料を十分施し肥料切れしないようにする。
  4. 発病が多くなる前に早めに刈り取る。

## すす紋病 *Trichometasphaeria turcica*

- I 防除の狙い 飼料用とうもろこし、ソルガム、テオシントなどに発生が見られ、一般に生育後期に発生して被害が大きい。防除は耕種的防除に重点をおく。
- II 防除法 ごま葉枯病の項に準ずる。

## 南方さび病 *Puccinia poiysora*

- I 防除の狙い 飼料用とうもろこしのみ発生が見られ、一般に生育後期に発生して被害が大きい。防除法は耕種的防除に重点を置く。
- II 防除法
  1. 抵抗性品種の利用
  2. 適期播種の励行  
発育最適温度が25～27℃であるので4月下旬～5月中旬が播種適期である。
  3. 肥培管理の適正化  
施肥基準を厳守し、多肥を避ける。とりわけ生糞尿の連続多施用は避け、完熟後に施用する。
  4. 連作の回避  
連作すると生育障害や一般病害が多発し、本病の発生を誘因するので、作付体系を見直す。

## イネヨトウ（ダイメイチュウ）

- I 防除の狙い 飼料用とうもろこしに発生が多く、ソルガムでは被害は比較的少ない。第1世代幼虫が早播きのとうもろこしに集中的に加害し、第2世代以降はほとんど加害しない。
- II 防除法
  1. 被害は早播きのものほど多く、6月以降に種子を播くと少ない。

## アブラムシ類

- I 防除の狙い 乾燥した年に発生が多く、梅雨明け後の8月から秋季にかけて急激に生育密度が高まる。多発した場合は下葉は枯れ上がり、すす病を併発して著しく品質低下をきたすので早期に防除する。
- II 防除法
  1. 生育初期に多発が予想される場合は早目に薬剤散布を行い、その後の増殖を防止する。
  2. 刈り取り期近くで多発した場合には直ちに刈り取る。
  3. 薬剤散布

薬 剤 名	有効成分	希釈倍数 使用量	農薬使用基準等による		備 考
			使用時期 (収穫前)	使用回数	
スミチオン乳剤	50%	1000～2000倍	収穫14日前まで	2回以内	いね科牧草に限る
		2000倍	収穫30日前まで	2回以内	飼料用とうもろこしに限る

## アワヨトウ

I 防除の狙い アワヨトウは各種のいね科牧草を食害し、採草地ではしばしば異常発生し、時には数ヘクタールにわたっていね科牧草が食いつくされ、収穫皆無になることがある。本虫は突如として大発生するので、その発生を予測するのは困難である。したがってその防除のポイントとしては、発生初期の防除に重点をおく。

なお、採草放牧地で異常発生するのは6月下旬～7月上旬にかけて多いので6月下旬に注意してやる必要がある。

- 6月末から7月初にかけての第1世代幼虫が加害の主体で、一部第2世代幼虫が混在する。
- 今の所、同一場所での、次世代や次年度の異常発生は見られない。したがって環境条件の急変により生態系が単純化し、環境抵抗が極度に低下した時異常発生するものと考えられる。このような牧野では4、5月の成虫の飛来に注意し、幼虫の早期発見につとめる。

## II 防 除 法

- 窒素質肥料の多施用をさける。
- 発生を認めたら早期に刈り取って給与するか、困難な場合はサイレージとして貯蔵へ仕向ける等の措置を行う。
- 幼虫は餌となる作物を食いつくすと他の圃場に移動する。早期に刈り取れない場合には、圃場の周囲を刈り取ったり、溝を掘るなどして他への移動を阻止する。

## タマナヤガ（ネキリムシ類）

I 防除の狙い 発芽後、草丈5cm程度の地際から茎が切断され株絶となる。被害は5月～6月に多い。従って、この時期に播種するものは薬剤処理が有効である。

## II 防 除 法

- 薬剤散布

薬 剤 名	有効成分	希釈倍数 使用量	農薬使用基準等による		備 考
			使用時期	使用回数	
ダイアジノン粒剤5	5%	6kg/10a	収穫60日前まで	2回	飼料用とうもろこしに限る
ガードベイトA	0.1	3kg/10a	生育初期（但し、収穫14日前まで）	4	飼料用とうもろこしに限る

## アワノメイガ

I 防除の狙い 主に飼料用とうもろこしで発生する。5月下旬から6月上旬、6月中旬から7月上旬、8月下旬から9月上旬、9月中旬から10月の年4回発生する。特に第3世代幼虫による被害は激しく、8月中旬以降に収穫する品種や作付けでは、被害雌穂率が100%に達する場合もある。出穂前後の雄穂に好んで産卵・食入するため、発生初期の防除に重点を置く。

## II 防 除 法

- 刈り取り期近くに多発生を認めたら早期に刈り取って給与するか、困難な場合はサイレージとして貯蔵に仕向ける等の措置を行う。
- 薬剤散布

薬 剤 名	有効成分	希釈倍数 使用量	農薬使用基準等による		備 考
			使用時期	使用回数	
※BT水和剤	10%	2000倍	発生初期・散布（但し収穫前日まで）	—回	100～300L/10a

## ツマジロクサヨトウ

- I 防除の狙い 本種の幼虫は広食性で、主にとらもろこしで発生する。本種は海外からの飛来によって国内に侵入すると考えられ、春～梅雨明けまで長期にわたり飛来すると推定される。圃場を定期的に見回り、早期発見に努める。  
老齢幼虫になると農薬の効果が低下するため、発生初期の防除に重点を置く。

## II 防 除 法

### 1. 耕種的防除

- (1) 刈り取り期近くに多発生を認めたら早期に刈り取って給与するか、困難な場合はサイレージとして貯蔵に仕向ける等の措置を行う。  
(2) 刈取後は、土に落ちた幼虫及び土中の蛹を防除するため、速やかに耕うんする。

### 2. 薬剤防除法

薬 剤 名	有効成分	希釈倍数 使 用 量	農薬使用基準等による		備 考
			使用時期	使用回数	
デルフィン顆粒水和剤	10 %	500倍	発生初期（但し収穫前日まで）	一 回	散布